

陸自駐屯地紹介シリーズ 第54回

衛生・医療の中核 三宿駐屯地

自衛隊中央病院を主体に

駐屯地シリーズ編纂委員会

はじめに

自衛官は宣誓の文言に於いて「…事に望んでは危険を顧みず、身を以て職務の完遂に努め、国民の負託にこたえる」ことを要求されている。訓練段階でも危険を伴うことは、毎年12月号に掲載している市ヶ谷自衛隊殉職者慰霊碑に新たに加えられた方々の数に見られる通りである。それゆえ、不幸にして傷病に至ったとき、不安のないよう対処する体制がなければならぬ。

また、阪神淡路大震災以来、それまで自衛隊を敬遠する傾きがなかったとはいえない、非常災害の対応に、自衛隊の救急医療機能が必須であることが国民共通の認識となっている。南別府駐屯地取材の折、自衛隊別府病院院長黒澤一佐に大分県行政機関を挙げて行う防災訓練に別府病院が重要な役割を果たすと伺った。

そんな思いのところへ、偕行社事務局の先輩から三宿取材を示唆され、自衛隊医療の中核である自衛隊衛生学校及

び中央病院の取材を思い立った。

だが衛生学校は陸上幕僚監部が行う総合視察が迫っていたので今回は中央病院を主体として取材した。自衛隊中央病院は建て替えられて2年目を迎えるというから絶好の時期だと思った。

アクセス

渋谷駅から東急田園都市線に乗り一つ目の「池尻大橋」で降り、住宅街の曲がりくねった細い道を約15分、迷いながら三宿駐屯地に向かった。40年前、ここに入院していた時の風景は全く変わっていた。見回して白い壁の、それかと向かった正にその建物が中央病院であった。陸自航空の捜索のカーン！この辺りは徳川時代は鷹狩りの場といい、明治から昭和前半を通じては近衛野砲兵聯隊や野砲兵第1聯隊、野戦重砲兵第8聯隊などがあり、兵馬が駒沢練兵場を馳駆した地域である。近衛野砲と野重8の碑は衛生学校玄關の両脇に整えられてあった。

(文末に写真)

三宿駐屯地

この駐屯地の司令は陸上自衛隊衛生学校長が兼務することと規定され、現在後藤達彦陸将補を駐屯地司令とし陸上自衛隊の部隊機関の

陸上自衛隊衛生学校

開発実験団部隊医学実験隊

第316基地通信中隊三宿派遣隊

衛生教導隊

陸海空自衛隊共同機関の

自衛隊中央病院

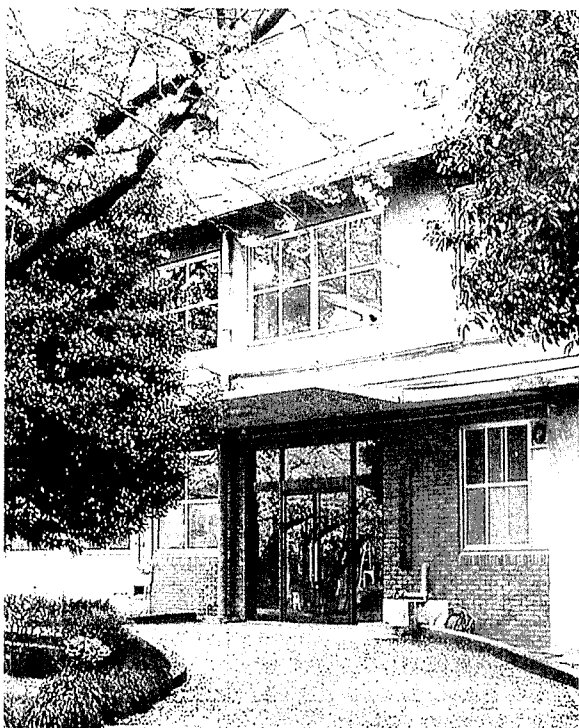
防衛省の機関として

技術研究本部研究所が所在している。

陸上自衛隊衛生学校

この学校の起源は久里浜にあった警察予備隊総隊学校内の衛生課程で、昭和30年に開設された三宿駐屯地に移って衛生学校が設立された。現在設置されている課程教育等を列挙する。

先ず幹部初級課程は医官及び歯科医官、薬剤官及び衛生官、看護官別の3コース。幹部上級課程は、医官及び歯科医官、薬剤官及び衛生官の2コース、幹部特修課程、幹部特技課程(新任医官特別)、幹部特技課程(看護師技術)、3尉候補者課程、上級陸曹特技課程(臨床検査技師)、初級陸曹特技課程(衛生設備)、初級陸曹特技課程(衛生

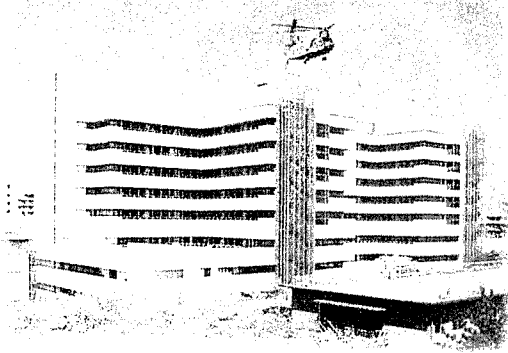


三宿駐屯地

資材)、公募陸曹課程(看護陸曹)、一般公募陸曹後期課程(衛生科)などの課程があり、加えて調査研究、国際貢献にかかる調査研究も行っている。

自衛隊中央病院

「陸海空共同機関たる中央病院」であり、分かり易くいえば診療対象が自衛隊員等であること、経費が陸・海・空共同負担であるということ、病院長は防衛省技官であるが前職は陸海空のいずれかの将官であった方で、現在の院長は防衛省技官渡邊千之氏、副院長は小林秀紀陸将、大塚八左右海将の2名であること、職員も陸海空自衛官や事務官・技官で自衛隊の医療組織の中核となっている。



全自衛隊医療の中核 中央病院

自衛隊は各駐屯地・基地に医務室があり、医官・歯科医官、看護師、衛生科隊員等を配置し健康管理と軽度の治療の一次医療を行い、地域ごとに地区病院が置かれて二次医療が行われている。自衛隊中央病院はその最終医療を預かる病院として位置づけられている。開設は昭和31年で、当初は平常時500床、非常時更に拡張可能という東洋一の設備を誇ったが、施設の老朽化、新しい検査治療設備の導入に伴う狭隘化に対処すべく建て替えを進め、平成21年4月に現在の病院で医療を開始した。

基本方針は、「健全・精強な隊員育成に寄与する」「隊員及び家族から信頼される病院」「自衛隊病院の中核として高度で質の高い医療を提供する病院」「国際貢献及び大規模震災等の危機に対応する病院」「地域医療の発展に寄与する病院」を挙げている。

建物使用状況

新築された病院の収容能力は公称500床であるが災害等非常時は大幅に拡張し得る。白い壁とガラスが映えて地上40層10階、地下2階、総床面積6万8千平方メートル(旧病院は2万4千平方メートルであった)、屋上にCH47型ヘリの発着が可能で、住宅街の間に屹立して見える。病院の入り口には、目測で幅約40メートル、奥行き8メートルの石畳があり、上には

透明の屋根が懸かって、大災害で大勢の負傷者が運び込まれたとき、ここで医官が患者の類別を行い、診療科と治療の優先順をつけるトリアージ(識別救急)を行うという。死亡乃至致命傷以上で手の施しようのないものを「黒」、一刻も早い処置の必要な「赤」、直ちに生命の危険はないが早期治療を要する「黄」、緊急治療の必要がない「緑」に分けるのだそうである。建物の入り口が既に救急処置の場に備えているのに感銘した。

地下2階は141台収容可能な外来患者も利用できる駐車場、地下2階と地下1階の間に人間の身長程の空間があり、此処に免震装置が設置されている。これは特殊な鋼を使った腕ほどの太さの棒をバナネ状に曲げたダンパーが72基、直径70センチ程の特殊ゴム製の振動吸収アイソレーター145台からなり、ビル

の重量9万トンを支えている。その耐震能力は関東大震災程度程度の震度7であっても手術可能のように設計され、つい最近も神奈川県地方に地震がありこの周辺もかなり揺れたが、病院の防災センターでは地震直後に駐屯地の各部隊等から「異常なし」の連絡を受け、でも何のことか分からなかったという。

地下1階は放射線治療、RI検査、霊安・解剖スペース、資材、給食、洗濯、など。1階から4階は診療科等5階から9階は病室、10階は機械室、屋上は夜間照明付きのヘリポートがある。エレベーターで屋上に案内して頂いた。運良く晴天で雪を戴いた富士山が思いのほか近くに見える、また新宿の高層ビル群も見えた。ヘリ進入・出発方向に障害物となる高層ビルが現れないことを祈りたい。

病院本館

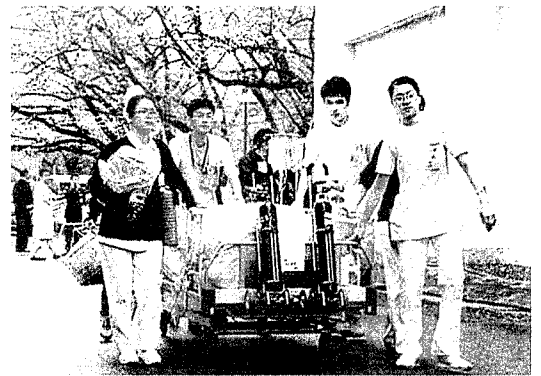
9階	
8階	
7階	西病棟、東病棟
6階	
5階	
4階	手術室、集中治療室 透折室、血管造影室 リハビリ室
3階	事務部門、病理検査
2階	外来、臨床検査(採尿・採血、 生理検査) 保健管理センター レストラン、売店
1階	外来、救急、受付・会計 薬局、内視鏡検査 放射線検査 (X線、CT、MRI)
B1階	放射線治療 RI検査、PET
B2階	駐車場

新病舎新築への軌跡

昭和31年の開設後間もなく拡張の必要が生じた。更に医療の近代化は目覚ましく、医療施設器材の導入が重なり、単にスペースの拡大だけではない諸般の見直し加わる。その経緯を中央病院企画室新病院運営検討推進事務局の運営調整官、則武政彦²佐と企画調整係、黒木智恵¹尉(女性)に、総務部総務課長、井上敦稔²佐も同席され、年単位の時程表により説明された。

平成8年〜9年は基本検討で、病院各部門から集まる委員と病院建設コンサルタント会社が侃々諤々の討議を行ったとのこと。設計が具体的事項に及んだ時委員の数は60人に及んだ。各科とも医師も看護師も外来患者の診療が終わった後、深夜までの討論を終えて企画担当者が記録を整理し終える頃は朝日が顔を出していることもあったという。平成10年は現況調査、平成11年は基本設計作成の期間で新病院の概略の形はここで定まり、12年から13年に実施設計作成、平成15年7月起工式、旧病院から新病院に患者を移送したのは平成21年4月1日で翌々日から外来診療を開始している。

10余年に及ぶ調整で最も心に残っていることを訊ねてみた。意外なことに「旧病院からの患者移送の日」を挙げられた。一枚の写真がある。重病なの



重病患者の移送

だろ、ストレッチャーの上で運ばれて周りには幾人もの医師、看護師などが付き添っている。移送の途中落命するかも知れないことを説明し同意を得たことだったという。

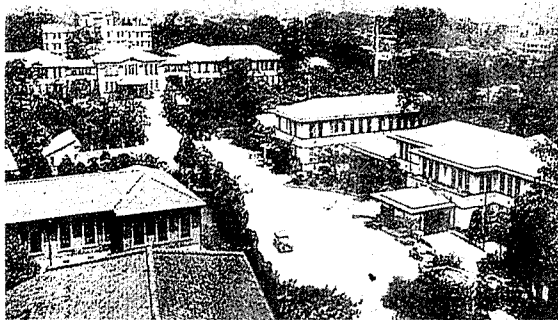
ここで敢えて新病院建設に誌面をとったのは、人の生死を扱う医療という厳粛・荘厳な職業に携わる方々の、学者が書籍や思索で思想を得るのは違い、もっと切実な自らの日常職務の実践を通じて哲学・倫理学・宗教観を身につけて行く。その職務への緊張感がこうした建設の計画過程にも垣間見えたように思えて感動したゆえであった。平成5年11月、中央病院は国から保健医療機関に指定され、広く開放され

て、防衛省関係者のみならず一般の診療治療にも従事している。病院勤務の詳細についても細かく取材したので披露したい気持ちに駆られるが、自衛隊病院特有のことではないと思うので割愛する。

陸軍医療懐古

陸軍時代の医療体制を尋ねたいが、終戦と共に陸軍病院は消滅し資料が少なく、調べてみると、昭和8年の軍事年鑑によると、全国に約100カ所の衛戍病院を設置してある。大東軍戦争開戦後は病院の数も病床数も著しく増加したであろう。

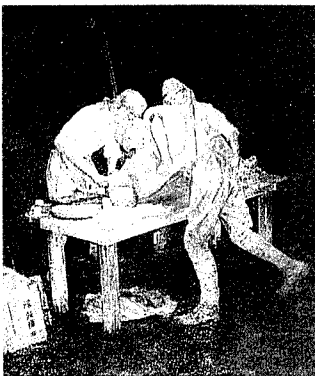
敗戦後多くの軍医はどのような再出



陸軍軍医学校全景

発をされたのであろうか。陸軍軍医学校第26期関亮氏のアルカディア市ヶ谷に於ける講話記録から、記憶に残った要旨。「教官が訓辞した。……陸軍軍医学校は解散する。貴官らは野に潜んで日本再建に尽くせ。もし米軍が皇室に手を出すような事があったならばその時は決起せよ……その言葉は体して皇居の近くの病院に勤めていた」敗れてなお愛国の至情に燃えておられたのである。

三宿にはどうしても欠かせない取材対象があった。医療資料館「彰古館」である。この三宿駐屯地の「彰古館」を訪ねる企画を立てた時、併せて見学を勧められたのが東京九段に近年開館された「しょうけい館」で、そこには戦場での治療の悲惨さが展示されていた。洞窟の暗い中で、3人の兵に押さえ込まれて麻酔薬もなく切断手術をしているジオラマを見たとき、洞窟一杯に響きわたる悲鳴の幻聴と、軍医の顔



洞窟内での麻酔なし切断手術



に吹き出す汗と悲しげな瞳の幻影を見た気がした。暫く椅子に腰をかけ、気持ちを整理する時間が必要であった。こんな暗い気持ちでは現場で日夜奮闘する医療関係者を取材出来る筈がない。医療関係者がどれほど厳しい勤務の毎日を送っているかは我が肉親の臨終直前の病室で痛いほど実感している。帰ろうとした玄関で足が釘付けになった。両陛下がこの展示館をご訪問になった時のお写真である。筆者の記憶には両陛下がサイパンの「ぼんさいクリフ」を前に深く拝礼されたお姿が残っている。このお姿こそ我が皇室の姿と感じていたのである。それ故にこのお写真を見たとき傷病兵に寄せるお心を思い光明を見た感じがした。

思いついて予習資料として靖國借行文庫で借り出した薄い一冊を取り出した。「彰古館……知られざる軍医医療」とあった。この本で幾つかの事実を知り、戦傷者に対して、我が国がその時々最高のケアと手当を続けて来



陸軍軍医大佐時代の芳賀榮次郎

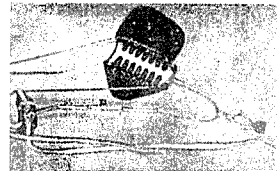
た印を探し出せ、曙光を見た感じがした。これは是非書かなければと、暗い気持ちは薄れ始めていた。

彰古館拝観

衛生学校校舎3階の教室が並ぶ一角に彰古館はある。館内に案内され見学するうちにだんだん鼓動が高鳴り、体中が熱くなるのを感じた。陸軍が如何に医療に意を注いだか、陸軍軍医・看護婦が如何に傷病兵をケアしたか。日露戦争後の捕虜収容所では日本人が如何に立派に振る舞ったかを感じたからである。ご承知の方も多いことと思うが敢えて書き連ねたい。

X線写真

日本最初のレントゲン器材が発明され効能が証明されたのは明治28年から29年にかけてのことである。当時ドイツに駐在中であった軍医芳賀榮次郎氏は即座入手の必要性を感じ、国費を待つことなく月給の何十倍に達する臨床用X線装置と同型器を私費購入し、帰



乃木式義手試作第二号機



柿沼殿と書かれた御賜の義手左右一対

国後軍医学校にその効能検証を依頼した。この器材を使用して撮影したX線写真が保存されている。

乃木式義手

展示品の中に義手があった。日露戦争後のこと、友人の石黒軍医総監の許を訪れて乃木大将が、喫煙される自らの手の動きから戦傷で両手を失った傷兵の不便さを思い方法はなにかと尋ね、凶面など資料を借り出したことに始まる。大将は自ら凶面を引き砲兵工廠に製作を依頼し、「息子二人を日露戦争で亡くした。乃木家は終わり、金はいらんのだ」と義手を作成し傷兵に贈ったという。ドイツの義手を凌駕する実物としてドレスデンの日本館にも展示された。

陸軍の災害派遣……関東大震災

実物展示の他に記録や写真が数多くある。関東大震災のおり陸軍の医療倉庫は焼失したが第一師団や近衛師団は戦時用の医療品を封印して持っていた。各師団では封印解除を命じ、被災

貴重な史料の山

彰古館所蔵品は研究者にとつて宝山という他はない。数多くの記録があり到底叙述に尽くせないが二つを挙げよう。日露戦役後日本が21カ所に作った捕虜収容所の記録文と写真等は、近代日本に生まれ変わる時の我が民族の徳義の高さを証する史料である。

また広島に原爆投下された後の現地調査を、残留放射能による生命の危険を冒して行った殆ど知られていない調



日本赤十字社の会津磐梯山救護活動
明治21年

地に出動させた。その中に軍医学校生があった。この出動は明治21年会津磐梯山噴火の時芳賀軍医が独断で災害地に医療活動を行ったことを教訓としている。軍の災害派遣の嚆矢である。芳賀軍医は処罰を覚悟したが逆に賞賛されたという。

査史料がある。終戦直後その所在が知られれば占領軍に接収されるだけでなく調査員の身の危険すらあった。講和条約発効まで嚴重に秘匿されていたものに違いない、貴重な上に無念の歯ざしりする史料である。



第2病室内部の露軍傷病兵（捕虜の治療も万全）

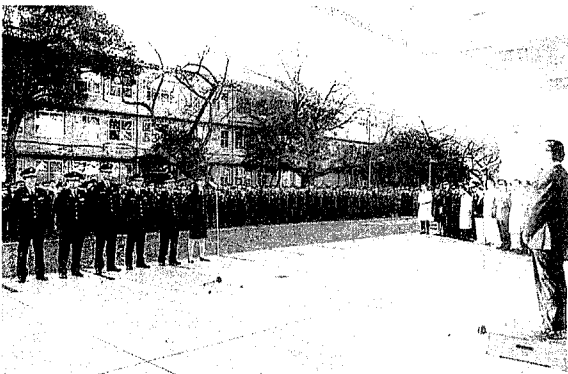
彰古館には未だ整理を尽くせない資料が山ほどある。見るほどにいろいろ考えた。「この所蔵品は衛生学校ばかりでなく、日本医学界の宝ではないだろうか。」「この印刷物は劣悪な紙を使っており酸性化しつつある。今電子化等の処置をしないと永久に失われる。」「宝とも云うべき所蔵品は相応しい資料館の体裁を整えて、相応しい展示棚に陳列したいものだ。素人の、

個人の思いである。

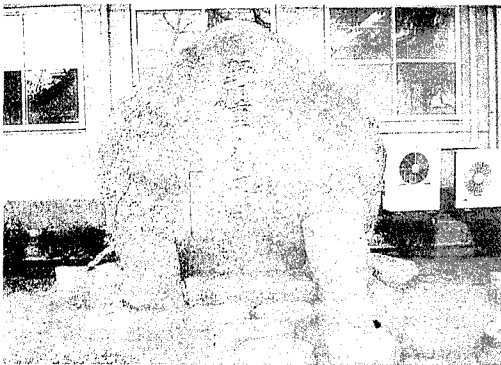
多忙な時期に説明や案内を頂いた自衛隊中央病院関係の前記の各位、総務課長井上敦稔2佐、総務課広報係湯沢誠一郎曹長、その他の各位に心から感謝したい。

追記 追加取材で再び三宿駐屯地を訪れた時、直前にハイチへの国際緊急援助隊員医師6名の壮行行事があったことを聞いた。せめて写真をお借りして次に披露する。広島の13旅団に配属され現地向かわれたのであった。健闘と無事帰国を祈りたい。

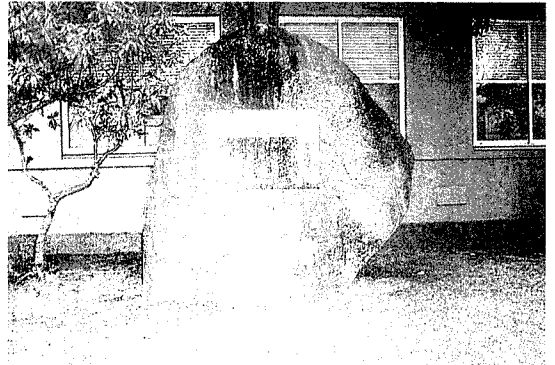
文責 松村興延 陸自64



全隊員見送りの中、行われたハイチ派遣壮行会



野戦重砲第8聯隊の碑



近衛野砲兵聯隊の碑

(注)陸軍の写真は全て防衛ホーム社発行の「彰古館」からの転載に依る。